

# 千波湖の「渡り鳥」を調べよう

## ～第9回千波湖環境学習会～

2023年1月22日（日）に、年明け最初となる第9回千波湖環境学習会を開催しました。今回のテーマは「千波湖の渡り鳥を調べよう」ということで、双眼鏡を使用した渡り鳥や野鳥の観察が行われました。新型コロナウイルスに加えて、鳥インフルエンザのニュースも流れる中、感染対策に十分配慮し予定通り開催することができました。当日は、寒波が来ると再三言われておりましたが、比較的穏やかな陽気の中で開催することができました。

この日の講師は、日本野鳥の会の会員で、逆川こどもエコクラブのメンバーとして幼稚園の頃から千波湖環境学習会に参加してきた高校2年生の飛田泰寛氏が父親の憲一氏と二人で担当してくださいました。双眼鏡を参加者に配布した後、飛田講師による双眼鏡の解説が行われ、ピントの合わせ方や、太陽を見てはいけない等の注意事項の説明の後、親水デッキから見える渡り鳥の観察からスタートしました。

ドバトの群れが上空を旋回しているのを双眼鏡で追いかけてみたり、近くまで寄ってきたハクチョウやカルガモを眺めたりしました。

双眼鏡を使うと、肉眼では見えない遠くの渡り鳥たちを観察することができ、参加者の大人も子どもも楽しんでいる光景が印象的でした。



講師としてマイクを握る飛田講師  
（左：憲一氏 右：泰寛氏）



双眼鏡でカモを観察する参加者

普段意識していない渡り鳥たちを、解説付きで観察してみると知的好奇心が刺激される感覚を味わうことができました。

「どこかに渡り鳥はいないかな」「あの鳥の名前はなんだろう」大人も子どもも楽しそうに双眼鏡を使って観察を続けていると、飛田講師から場所を移動する話があり、参加者は講師と一緒に千波湖をぐるりと回り、近くの森へ足を踏み入れました。

ハクチョウやカモたちは人慣れしている様子で、すぐ近くまで寄ってきてくれるのでとても観察しやすく、子どもたちにとって双眼鏡を使う良い練習対象になりました。

中には、餌をめぐってか、喧嘩を始めるカモもあり、それを参加者の子どもたちがなだめようと声をかける微笑ましいシーンもありました。

千波湖の親水デッキやその周囲から、湖の中に向けて双眼鏡を覗くだけでも色々な鳥を見つけることができました。



森の中で鳥を探しながら歩く参加者

冬の森は、木々の落葉におおわれ、閑散として静かな雰囲気でした。肉眼で周囲を見渡しても、生きものの気配はありません。双眼鏡を持っていた子どもたちも、どこにレンズを向けたらいいかわからずキョロキョロしていました。渡り鳥が群れで優雅に泳いでいた千波湖とは違って、周囲の森では鳥の姿を見ることができず子どもたちの遊ぶ声が聞こえるだけでした。

先ほどまでとは打って変わって閑散とした森の中で、飛田講師は立ち止まって参加者に声を掛けました。

「このように、森の中では鳥を見つけることがとても難しいです。ですから、こういう場合は音で探します。皆さん、耳を澄ませてみてください」

その言葉に、参加者はそっと音に集中しました。最初は風の音や誰かの足音程度しか聞こえてこない森の中でしたが、次第に「聞こえた」と嬉しそうな声が参加者から出てきました。

確かに、耳を澄ましてみれば小さな「チュンチュン」という声や、「ピィィィ」と鋭い声が聞こえてきます。いったいどこにいたのだろうと声のした方向を探してみると、先ほどまで全然見つけられなかったヒヨドリを見つけることができました。

森を抜けて、親水デッキに戻ると、今度は全員で見つけた野鳥の種類を確認する時間となりました。用意したチェック項目の中で、双眼鏡や耳を使って確認することのできた野鳥にチェックしました。

今回の学習会では、千波湖周辺で観察することのできる鳥の種類について学ぶことができました。さらに、飛田講師によると鳥は『留鳥』『夏鳥』『冬鳥』『旅鳥』に分けられるようで、季節によって見られる種類も変わるそうです。色んな時期の鳥を観察してみるのも面白いかもしれませんね。



見つけた鳥にチェックを入れる

提供品等ご協力をいただきました、ありがとうございます。

消毒スプレー：花王株式会社様

お菓子：東部燃焼株式会社様

ボールペン：株式会社ユーゴー様

双眼鏡・単眼鏡：茨城県霞ヶ浦環境科学センター様